

## 熊本大学学術リポジトリ

## Kumamoto University Repository System

Title	雑歌：文苑
Author(s)	錦山；基紀；一心；芝峰；桃江；清泉；山人
Citation	龍南會雜誌， 6 2： 5 6 - 5 8
Issue date	1897-12-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5022">http://hdl.handle.net/2298/5022</a>
Right	

紅葉を折りてそ人にかたならむ今日のまどゐの心ふかさを  
秋山の夕日うつろふもみち葉をたをるもをしくたをらぬをし  
今日はいさ錦きつゝもかへらまし見きやど問はん人のあるかに  
夕日影にはふ山への紅葉に春をうつまて小鳥なくなり

評曰、春をうつして一首の眼、おもしろし

もみち葉のあかき心を今日こゝにつとふ學ひの友にこそみれ

評曰、なんなし

其前夜の思ひを

いく度か夜半のあらしに寢覺まつ明日見ん菴の紅葉いかにと

評曰、秋の色を惜しむまことにいくの如し

雑歌

草菴紅葉

はらふへき人もあらしに紅葉散る柴の戸さしの秋の夕暮

評曰、感ふかし

擣衣

たがためにうつか砧のたへくゝに音を聞ゆる小夜のねさめに

初霜

錦山

芝峰

奇熊

一心

山人

錦山

基紀

澄む月にさゆる夕の白露や身にしみわたる今朝の初霜

河上霧

ゆふ月のやどりやいつて絶間なく畫津の川霧そらにたちたつ

成道寺の紅葉

秋風に木々のもみち葉ちりくれば池の水さへちしをどそなる

雲岩寺に詣てゝ

さらぬたに昔をしのふ所なりいたくなふりを秋のむらさめ

田原坂懷古

玉あられふりにし跡の田原坂まつのあらしや名残なるらむ  
田原坂ありし古をとひくれば人まつむえそ音にたてゝなく

菊

れくれても花の色香のれくれぬは霜にれこれる菊にそありける

評曰、人のまたいいいたらさる處なり

富士艦の歡迎に

いにしへのふしの煙を波の上に見るそうれしき今日にもある哉

評曰、めつらしきよみさなり

船路にてよめる

播磨灘追門の汐風たちぬらえさし行く方に雲迷ふなり

一心

芝峰

桃江

清泉

はる／＼と八重の沙路をゆられきてなほも雲井を指して行く哉  
見渡せば須磨も明石もなかりけり瀬戸の内海波の嶋山  
行末ばいかに鳴海の濱千鳥はてなき海に身をやつくさん

霜夜

風さやく軒塲につもる小夜霜にこほりて寒き白川の水  
たらちねのなさけもあつき冬衣重ね／＼も思ふ夜半かな

落葉

冬ふかくなりにつけらしな木枯のさわかぬ夜半も木の葉散りけり  
さ／＼かにの糸一筋を命にてしはし梢に落葉のこれり

評曰、めてたし

爐邊閑話

まどぬきて語ろふ夜半はたくしはの煙るもいと／＼樂しかりける  
埋火の消ゆるもしらて思ふどち行末遠くかたるたのしさ

歲暮述懷

たどり行くふみの學ひの道れそく今年もはや／＼暮にける哉  
ことゑこそことしこそとは思ひを又も今年のくれにけるかな  
流れゆく月日とかねてゑりなから驚かれぬる年の暮かな

評曰、くり返し／＼ても暮れ行く海のやちたひせん方もなし、われ常にこの感あり同感々々